［報告］

2009年度　学びの杜・学術コース・文学探究講座
講義の概要

以下は、2009年度開講の「学びの杜・学術コース・文学探究講座」の概要である。「文学探究講座」の各テーマと担当の講師は、第１講「日本語の不思議」町田健先生（言語学）、第２講「キリストはどんな顔だったのか？」木俣元一先生（美学美術史学）、第３講「ヘレニズム文明を発掘する」周藤芳幸先生（西洋史学）、第４講「日本語に入ったインド古典語　サンスクリット（梵語）」和田壽弘先生（インド文化学）であった。開講に際し、担当の先生方にビデオ撮影を許可していただき、後日、概要をまとめたのが以下の記録である。文字化については、ビデオテープを参考に、中等教育研究センターの責任において、教育発達科学研究科院生の岩瀬真寿美さんに依頼し作成した。なお、講義内容の記述に関する不備については、当センターの責任である。

1. 日本語の不思議

町田健先生（言語学）　2009年７月31日（金）　10：30―12：00

概要：日本語は難しいとか、最近は日本語が乱れているとか言われます。日本語は難しいところもあるし、意外にやさしいところもある言語です。このことについて、言語学という学問の視点から解説します。

（資料：Ａ４×６頁）

【導入・世界の言語】

今日は言葉についてお話する。みなさんが言葉について勉強しているのは国語と英語であろう。基本的なところでは言葉は同じであるが、異なる部分もある。今日は、私たちが使っている日本語が世界のなかでどのような位置づけにあるのかということについてお話をしよう。

世界には言語は大体7000ほどある。もちろん数え方によっては異なる。世界の国は200ぐらいあり、そこで7000の言葉があるということであるから、一つの国では平均35ぐらいの言葉が使われているということになる。私たちのように、一つの国で日本語しかない（アイヌ民族はいるけれども、アイヌ語はなくなってしまった）というのは珍しい。隣の韓国も朝鮮語しか使っていないという点で珍しい国である。他方、中国では多くの言葉があり、アメリカ合衆国でも英語だけでなく、スペイン語を話す人が何千万人もいる。そのうちの多くはスペイン語しか使えない人である。アメリカではフランス語やギリシア語も使われている。またフランスでも、さまざまな言語が使われている。

アフリカでもたくさんの言語が使われている。

【語族・音韻対応・日本語は何語族？】

このような多くの言語のもとを遡るとそれは一つである。人類がいろいろなところへ移住していくうち、分かれていって7000にもなった。その起源である言語がどのようなものであったかについては分かっていない。10万年ぐらい前にどのような言語が使われていたかは分からないが、今から1万年前や5000年前には一つの起源であったということが分かる。なぜなら語系が似ているからである。語形が似ているということは、もとが同じであるというように考えなければならないのである。

	古代インド語	ギリシア語	ラテン語	ゴート語	英　語
父	pitar	pate:r	pater	fadar	father
3	trayah	treis	tres	threis	three
イヌ	s'va	kuo:n	canis	hunds	hound
知る	janami	gignosko:	gnosco	kunnan	know
来る	gamanti	baino	venio	qiman	come

インド・ヨーロッパ語族は世界で最も有力な語族である。そこには英語、フランス語、ドイツ語、ギリシア語、ラテン語、サンスクリットが含まれる。語族の種類には何十もある。マダガスタル、ハワイ、イースター、台湾はオーストロネシア語族である。

日本語はどの語族に属するか分からない。なぜなら日本語の単語と、意味と語形が似た単語を持つ言語が見つからないからである。日本語の文法は朝鮮・韓国語とほとんど同じと言って良いが、文法が似ているからと言って、もとが同じであるということは言えない。文法にはあまり多様性がないからである。日本語は仲間のいない孤立した言葉である。もちろん、言語のもとは一つであるのだから、どこかで似たような言葉があったはずである。発音が簡単であるという点では、日本語はハワイ語やインドネシア語とよく似ており、文法については朝鮮・韓国語やモンゴル語に似ているということから、日本語の仲間についてはいろいろな説があるが、日本語の起源は分かっていないのである。

【膠着語としての日本語・膠着語以外の類型】

日本語は語順ではなく「が」や「を」などの助詞を使って主語や目的語を表す言葉である。このような言語は世界の言葉のうち六割を占める。語順でそれらを示すのは世界の言葉のうち二割で、残りの二割は活用を使って示すものである。活用を使って表すものに、昔のギリシア語、ラテン語、そして今のロシア語、チェコ語などがある。「が」や「を」や「た」などの助詞を名詞にくっつけて、それによって主語、目的語、過去などを表す言語を膠着語と呼ぶ。

日本語は半分以上が奈良時代以降に中国から取り入れた漢語である。英語にはフランス語から借りた単語が多い。イギリスでは上流階級の人たちがフランス語を使ったので、基本的な単語がフランス語であることが多い。turn, storyなど、英語の単語の半分はフランス語である。関係代名詞の

省略は英語では当たり前だと思われるが、それは英語だけで、他の言語ではそのような省略はしない。

【日本語の音韻体系は単純・アクセントの不思議】

日本語の発音は単純で簡単である。母音は「あいうえお」の５つしかない。ギリシア語やラテン語も発音は簡単である。大文明を背景にする言語の大体は発音が簡単な言葉である。なぜなら多くの人が使うからである。

単語ごとに高い低いが決まっている。これをアクセントと言う。これは方言によって異なる。一般的にはこれをイントネーションと呼んでいるが、専門的に言えばイントネーションとは疑問文であれば語尾を上げるというようなものであり、方言によってもほとんど共通なものである。

【日本語は規則動詞ばかり・構造の決定法も規則的】

日本語はほとんどが規則動詞であるため、単純である。五段活用や一段活用も、一度覚えてしまえば正しく活用することができる。不規則動詞にはカ行変革活用とサ行変革活用の二つしかない。他方で英語の場合は不規則動詞が多い。日本語では、構造の決定法、すなわち語順の決まりも規則的である。助詞と助動詞を付ける場所が動詞の前であるか後ろであるかについては、日本語と英語では反対であるが、その理由は分かっていない。

【日本語には「ない」ものが多い・日本語の全体的特徴】

日本語には現在形と未来形の区別がなく、冠詞もなく、関係代名詞もない。英語に比べるとシンプルなのが日本語である。しかし主題はあるため、「が」と「は」を区別する言葉である。現象としてその違いの使い分けについては私たちは分かっているが、その理由については分からない。日本語は英語と比べると規則性が高く、分かりやすい言葉である。

【日本語は単純なだけではない・pの音が長期間なかった・「連濁」がある・形容詞的品詞に三種類ある】

日本語ではpの音が上代から明治時代まで使われなくなった。pはどのような言語にもあり、幼児が最も早い時期に発音できるようになる音の一つであるのにもかかわらずである。また日本語には連濁がある。連濁とは、複合語で二番目の要素の最初の子音が無声子音から有声子音に変わることである。たとえば「木木」を「きぎ」と発音したりすることである。また日本語には形容詞品詞に三種類がある。形容詞、形容動詞、連体詞の３種類である。

【自動詞の受け身、持ち主の受け身がある・主語を省略する・冠詞がなくていいのか?・敬語は面倒くさい】

自動詞の受け身や持ち主の受け身があるのも日本語の特徴の一つである。自動詞の受け身とはたとえば「太郎は息子にぐれられた」という文に見られるものであり、持ち主の受け身とはたとえば「太郎は財布をすられた」という文に見られるものである。

また主語を省略したり、冠詞がないという特徴が日本語にはある。日本語の敬語は面倒くさい。敬語はなくても良いものであるからこそ、それを上手く使うことが求められるのである。日本語の

特質として敬語がなくならない理由の一つには、主語を省略できるからという理由があるだろう。

2. キリストはどんな顔だったのか？

木俣元一先生（美学美術史学） 2009年7月31日（金） 13：00―14：30

概要：キリストは実際にはどんな顔だったのか。美術作品を資料として現代をさかのぼって行くと、意外な事実が浮かび上がってきます。キリストとは何者なのか、という謎に迫ります。

（資料：A4×11頁）

【今日の授業がめざすもの】

私は中世ヨーロッパのキリスト教美術を専門にしている。今日は、美術に表現されたキリストの顔に注目し、イメージの歴史をさかのぼりながら、美術の背後にある歴史的状況や人々の心のなかにあったことについて考えてみたい。現代日本では何となくキリストのイメージというものを持っている。たとえば中村光著『聖（セイント）おにいさん』（講談社、2008年）のキリストのイメージなどがある。髪の毛が長くて、真ん中で分けており、やせ型で、ヒゲがあごと口元にある。年齢としては30歳ぐらいで、頭のおでこのあたりに荊の冠を付けているというイメージである。

【キリストはどう描かれてきたか？】

美術の歴史をさかのぼってみよう。私たちのイメージするキリストと共通する表現が見られる。長髪にヒゲというイメージである。17世紀後半のグイド・レーニという画家が描いた《荊冠のキリスト》（1639－40頃　パリ、ルーヴル美術館）は髪が長くヒゲがありやせ型であり、私たちが現在イメージするキリストとそれほど異ならない。400年ぐらいの間、キリストに関する表現は変わっていないのである。

さらにもう少しさかのぼっていってレオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》（1495－97年）を見てみよう。晩餐と言っても豪華な食事ではない。真ん中に座っているのがキリストであり、左右に六人ずつキリストの弟子たちが座っている。キリストが弟子たちの前で、弟子たちのなかに自分を裏切る人がいるということを発言する。それに伴って、弟子たちは一体誰がそのような人物であるのかとお互いにショックを受けざわめいている。弟子たちの感情をレオナルド・ダ・ヴィンチは表情や手振り身振りなどによって表現しようとしている。ここで真ん中に座っているキリストの顔も、現代私たちがイメージするキリストの顔とほとんど変わらない。髪が長くて頬がこけていてヒゲを生やしているイメージである。

次に15世紀前半のキリストをかたどった彫刻作品を見てみよう。スリューテルの《磔刑のキリスト》（15世紀前半「モーセの井戸」より）に描かれるキリストも、私たちのイメージするキリストと変わっていない。

さらにさかのぼってトスカナ地方の画家による《キリストの頭部》（1175－1225頃　フィレンツェ、ウフィッツィ美術館）を見てみよう。中世の作品なので、これまで見てきた作品とは少し異なる。たとえば髪の毛が太い線によって表現されており、顔のしわの表現の仕方もかなり形式化したもの

である。このような表現の相違はおいておき顔の特徴に着目すると、やはりこれも私たちのイメージするキリストと変わらない。

【ヒゲのないキリスト】

このように美術の歴史をさかのぼっていくと、12世紀ぐらいまでは、ヒゲのあるキリストが存在している。ところがある時代までさかのぼると、ヒゲのないキリストが登場してくる。非常に大ざっぱな分け方であるが、12世紀ぐらいまでは、ヒゲのあるキリストとヒゲのないキリストが共存していたと言える。

12世紀の作品である「創造主としてのキリスト」におけるキリストは丸顔でヒゲがなく、頭の後ろに円盤状のお皿の形が描かれている。その円盤に付いている十字架は、彼がキリストであるということを見ている人に分からせる印である。アダムは最初の人間であり、アダムは土という意味からきている。神は土をこねて最初の人間をつくった。神の口から糸のようなものがでており、その先端に鳥が描かれている。この鳥は神の霊を表わしている。それがアダムに向かっていっており、これがアダムの鼻の穴から体に入る。この鳥のような神の霊がアダムの体に入ると、アダムは動き始める。アダムしか存在しなかったときは男性も女性もなかった。その後、アダムの右脇腹の辺りから一人の人間がとび出しているが、それはアダムからつくられたとされるエヴァという女性である。この時点に性差が生まれた。その後、アダムとエヴァはエデンの園という楽園に連れて行かれる。そこでは仕事をする必要がなく、服を着る必要もなく、病気もせず、死にもしない。とても素晴らしい世界であるが、そこで知恵の木に生る神に禁じられた果実を食べてしまい、その結果最初の罪を犯したということで楽園から追放されてしまう。その結果私たちは楽園の外にいて仕事もしなければならないし病気になったり死んだりもする。しかしその結果人間は智恵を身に付けることができたということである。

続いて1000年頃の作品、すなわち今から1000年ぐらい前の作品である《使徒の足を洗うキリスト》（1000年頃『オットー３世の福音書』より　ミュンヘン、バイエルン国立図書館）を見てみよう。中央に描かれているのがキリストである。最後の晩餐の前にキリストが弟子たちを集めて弟子たちの足を洗ってあげる場面である。左に描かれている人物はペテロであり、白髪の年老いた男性として描かれている。この場面のキリストにはヒゲが描かれていないが、無精ヒゲが生えているようにも見える。中世においてはパターン化された描き方をする。すなわち、明るいところと暗いところとを明確に使い分けることによって立体感を表現する。1000年頃、すでにヒゲのないキリストが登場していた。

さらにさかのぼって、シナイ山、聖カタリナ修道院所蔵のイコン（６／７世紀）を見てみよう。イコンとは一種の肖像画のようなもので、聖なる人物の上半身の肖像画を描いて、お祈りをするときの対象とするものである。お祈りとは相手に向かって話しかけるように、そして対話をするように行うものなので、相手が目の前にいた方がお祈りがリアルなものになる。聖人と呼ばれるのは一般的に、キリスト教の信仰のために迫害をされ殺されてしまった人々である。ここで描かれるキリストにはヒゲがあり、髪の毛も長く、頬がこけており、私たちがイメージするキリストである。このキリストは、右目と左目で微妙に見ている方向が違うように描かれる。右目の方が上を見ている

感じで左目が真正面を見ているような感じである。このよう描き方の理由としていろいろな説明の仕方が考えられるが、生きている感じがするという理由があるだろう。右目を見たときと左目を見たときとで別の方向を向いているように見えるため、絵を見ている人はキリストの目が動いているような印象を持つのである。

続いて《パンと魚の奇蹟》(520年頃　モザイク　ラヴェンナ、サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂)を見てみよう。真ん中に立っている人がキリストである。私たちがイメージするキリストとはずれがある。男性というよりも女性に近いようなキリストの描き方である。

続いて《キリスト、聖ペテロ、聖パウロ》(389年頃　ユニウス・バッススの石棺の部分　ローマ、サン・ピエトロ大聖堂、地下)を見てみよう。キリスト教が公認された頃ぐらいの作品である。真ん中に座っているのがキリストである。小学校高学年か中学生ぐらいの年齢のキリストである。このように12世紀を超えてさかのぼっていくと、ヒゲのあるキリストとヒゲのないキリストという二種類があったのである。

【縮れ毛のキリスト】

この他、数は少ないが、短く縮れた毛のキリストの表現が見られる。東ローマ帝国の皇帝であったユスティニアヌス2世が皇帝の地位を追われ、その後再び皇位についたとき(705年)のコインを見てみよう。髪の毛が短く縮れており、あごがとがった逆3角形の顔の形のキリストである。

続いて6世紀のキリスト(シナイ山、聖カタリナ修道院)を見てみよう。ここに描かれるキリストも髪の毛が短く縮れており、あごがとがった逆三角形の顔の形である。

【複数のキリスト像・なぜ複数のキリスト像があるのか?・キリストがどんな顔をしていたのか知るための情報源】

ここまでの考察をもとに結論を述べると、時代をさかのぼっていくほど、キリストは多様に表現されていたということである。また多様なキリスト像が、次第に現代人がイメージするようなキリスト像へと統一されてきたという歴史的な展開が読み取れる。普通はこの逆であり、最初は統一されていたイメージが時代とともに枝分かれしていくという流れが自然な現象であるにもかかわらず、そうではないということは不思議である。キリスト像の統一は主に13世紀以降のことであると考えられる。ここには、ある種の意図的な統制が加えられた可能性がある。

なぜ複数のキリスト像があるのか？なぜ多様なキリスト像があったのか？その理由についてこれから考えてみよう。その前に、複数のキリスト像のうち、どれが本当のキリストの顔に近いのか、という問題を考えてみたい。

キリストがどのような顔をしていたのか知るための情報源として考えられるものを挙げよう。①美術、②新約聖書の記述、③生前に描かれた肖像画、④キリストの顔の奇蹟的プリントが挙げられる。そのうち①については、ここまでの授業で見てきたように、時代をさかのぼるほど多様にキリストが描かれていたため、あまり情報源としては役に立たないという結論を下すことができる。

【聖書の記述・生前に描かれた肖像画・聖ルカによるイコンの伝説・聖ルカ伝説の問題点】

続いて②の新約聖書の記述のなかに、キリストがどのような顔をしていたか分かる記述があるかもしれないということがある。しかし残念ながら、新約聖書には、キリストの行動や言葉が記されているだけであり、キリストの容貌や容姿についての記述は全く見られない。

③については、もし残っているならば重要な情報源になるだろうと考えられる。新約聖書のなかの『ルカによる福音書』の著者である聖ルカが、キリストの生前に肖像画を描いたという伝説がある。ルカは医者として知られるが、彼の福音書におけるキリストの幼年時代の記述の詳細さゆえに、画家であるとも考えられたのである。ところがルカが描いたキリストの肖像画は、キリストの子ども時代のものである。ルカが描いたとされる聖母子のイコンの一例（6世紀？　ローマ、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂）を見てみよう。この絵が6世紀に描かれたとなると、それはキリストが亡くなった後であるため、これが重要な情報源として役に立つとは言えない。聖ルカ伝説にはその他にも問題点がある。すなわち、キリストが子どもの頃にはルカはまだ生まれていないため、彼が幼子イエスを描くことはできなかったはずであるということである。

【キリストの顔の奇蹟的プリント】

続いて④については、キリストの顔がどこかにプリントされて残っていればそれが情報源になるということが言える。そしてこのような布が存在するのである。その布については大きく分けて二種類がある。一つには聖骸布、すなわちキリストの遺骸を包んでいた布に残された痕跡である。二つ目に聖顔布があり、そこにはマンディリオンとヴェロニカの二種類がある。まずはカトリック教会が公開している聖骸布を見てみよう。非常にうっすらとしか残っていないので分かりにくいが、顔の部分だけネガの状態で見てみると、キリストがヒゲを生やした人物であることが分かる。しかし聖骸布をどこまで信じて良いかという信憑性の問題がある。本当に当時の布であるという確実な情報はないのである。

【マンディリオン・マンディリオンとケラミオン・ヴェロニカ】

続いてマンディリオンを見てみよう。シリアの都市エデッサの王アフガルが病に倒れたとき、彼はアナニアスという一人の人物を派遣しキリストをエデッサに招いて治癒を請うたが、キリストは自身の顔を布に押し当てて王に送った。このとき、キリストは水で顔を洗い、タオルで顔を拭ったところ、タオルに顔が転写されたという。マンディリオンは、アラビア語でタオルを意味する語から派生している。王はこの聖顔布によって奇蹟的に治癒した。これについては、イタリアに二つほど残っている。一つはローマ、ヴァティカンにあるマンディリオン（6世紀）、二つ目にジェノヴァにあるマンディリオン（6世紀？）がある。これらを見るとキリストの顔にはヒゲがあったということが言えそうだが、これらも資料としてはあまり参考にならない。

マンディリオンをタイルの下に隠しておいたところ、キリストの顔がタイルに奇跡的に転写された。これをケラミオンと呼ぶ。マンディリオンとケラミオンを並べて描くヨアンネス・クリマコス著『天国の階梯』、12世紀の写本挿絵（Vatican, Biblioteca, Cod. Ross. Gr. 251, fol. 12v.）を見てみよう。左側にマンディリオンが、右側にケラミオンが描かれ、その間に天空が描かれる。間にある天

空に、天上世界に存在する不可視の神の顔をうっすらと描くことにより、見えないものを見えるように感じさせるような特別な表現が使ってある。

続いてヴェロニカを見てみよう。キリストが十字架をエルサレムの郊外にあるゴルゴタの丘へ運ぶ途中、顔が汗などでどろどろに汚れており、一人の女性が彼の顔を布で拭ったところ、その布にキリストの顔が奇跡的に転写されたという伝説に基づいている。この聖女およびその布をヴェロニカと言う。この布は「スダリウム（sudarium)」とも呼ばれる。ヴェロニカとは、「vera icona」すなわち「真の像」という語に由来する。マンディリオンのヨーロッパ版として、12－13世紀に広まった伝説である。したがって、ヴェロニカも当てになる情報ではない。ヴェロニカに関する情報を寄せ集めて描かれたのが『ヨランド・ド・ソワッソンの時禱書』（13世紀末　ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館）である。

【奇蹟的プリントからは、真のキリストの顔は分からない】

結論として、奇蹟的プリントからは真のキリストの顔は分からないということが言える。現存するマンディリオンやヴェロニカは、キリストと同時代ではなく、後につくられたものであった。したがって一種のフィルターを通過してきたものである。ここで、多様なキリスト像が存在したという基本的事実にもう一度戻ってみよう。実際のキリストの顔がどのようなものであったとしても、この事実は無視できないのである。

【多様なキリストの顔はどこから来たか】

古代ローマやヘレニズム世界で信仰されていた神々の容貌がキリストに転用されたということが分かる。長髪でヒゲのある顔の神として、神々の王であるゼウス（ジュピター)、医術の神であるアスクレピオス、またセラピスなどがおり、ヒゲのない若者の顔としてアポロン、酒の神であるディオニュソス（バッカス）などがいる。古代ローマやヘレニズム世界では多神教であったが、キリスト教になると一神教となる。しかし多神教の文化が突然なくなるわけではなく、これまでの神々がキリストの顔として使われるようになったのである。

それぞれの国や地域の人々がそれぞれに期待する、あるいはそれぞれにふさわしいキリストの姿を思い浮かべられるように、キリストのイメージはあえて統一されることなく空白にされたのではないだろうか。それが13世紀以降、統一されてきて、現代にまで続いているのである。

【キリストのヘア・スタイル・女性として表現されたキリスト？】

キリストのヘア・スタイルに注目しよう。これは他の人物から区別する記号であり、救世主の伝統的イメージである。《ピラトの前のキリスト》（350－360年頃）を見てみよう。当時、男性の髪の毛は一般的に短かったため、他の人物からキリストを見分けられるように機能的表現として、キリストを長い髪の毛として描いたということが言える。

また、女性として表現されたのではないかと考えられるキリストについて、《キリストの洗礼》（ラヴェンナ、アリウス派洗礼堂　6世紀）を見てみよう。キリストは30歳頃にヨルダン川で洗礼を受ける。右側に立っているのがヨハネでありキリストの親類である。彼はキリストより半年年上であ

る。真ん中に描かれるキリストは女性的に描かれている。古代ローマやヘレニズム世界には女性の神もいたし、女性信者にとって女性の神はお祈りがしやすいこともあるため、女性として描かれるキリストもあるようである。

多様なキリスト像があった理由として、キリスト教がローマ帝国の宗教となった古代の歴史的な状況が関係すると考えられる。すなわち、多神教から一神教へと形が変わったのであるが、多神教という社会的習慣は簡単に変わることがなかったということである。キリスト像は見る者によって姿を変え、その期待や願望に柔軟に応える必要があったということが言える。

【多様なキリスト像があった理由・まとめ】

多様なキリスト像が淘汰された理由は何か、なぜキリスト像が一本化されていったのか。それについては、1200年頃のヨーロッパで何かが起こり一本化されたのではないかと言える。具体的には、1200年頃にヴェロニカを使って贖宥のための祈りを行うキャンペーンがあったということが挙げられる。

キリストの顔の美術表現をさかのぼると、13世紀以降キリストの顔が統一され、現在に至っていることが分かる。1200年頃に切れ目がある。さらに時代をさかのぼると、多様なキリスト像が見いだせる。これらの顔のタイプは古代の神々から受け継がれ、人々の多様な願望に応えようとするものであった。マンディリオンやヴェロニカといった奇蹟的プリントにはフィルターがかかっている。1200年頃から教会は戦略を展開するため、キリストの顔を一本化する必要があった。参考図書については、中村光『聖（セイント）おにいさん』（講談社　2008年）、ガエタノ・コンプリ監修『聖骸布の男　あなたはイエス・キリストですか？』（講談社　2007年）、Hans Belting, *Likeness and Presence. A History of the Image before the Era of Art,* The University of Chicago Press, 1994. Thomas F. Mathews, *The Clash of Gods, A Reinterpretation of Early Christian Art*, Princeton University Press, 1993.

3. ヘレニズム文明を発掘する

周藤芳幸先生（西洋史学）　2009年8月3日（月）　10：30―12：00

概要：ギリシア文明とオリエント文明との出会いから生まれたヘレニズム文明。この授業では、その時代に生きた人々の暮らしを、エジプトで行っている遺跡の発掘成果から復元します。
（資料：A4×8頁）

【ヘレニズム時代とは？】

今日は歴史についてお話したい。専門はギリシア考古学である。今日お話するのはエジプトの話であり研究中のものである。高校までの勉強はすでに出来上がった知識を勉強するものであるが、大学では教科書がなく、第一線の研究、すなわちまだ出来上がってない事柄を学ぶ。

はじめに概説的なところを説明したい。ヘレニズム時代は紀元前338年－前30年のほぼ300年間である。世界史のなかでは不当に軽視されているところである。世界史ではアレクサンドロス大王

の東征の後、歴史の舞台は唐突にローマへと移行する。問題はこの間がどのように繋がっているかということである。ローマがいつの間にか地中海世界を征服しているような形で描かれているが、実際にはこの時代を大きく動かしたのはアレクサンドロス大王の後継者たちが築いた諸王国（たとえばエジプト、シリア、マケドニア）と、ポリスの伝承を継承する都市国家（たとえばロドス、ペルガモン）であることを見逃してはならない。今日は中エジプト・アコリス遺跡での調査とそこで得られたデータから、ギリシア文明の拡大について講義をする。

【アコリス遺跡】

紀元前270年ごろの地図を見てみよう。アンティゴノス朝の王国、セレウコス朝の帝国、およびプトレマイオス朝の王国の三つがヘレニズムの三王国である。この三王国に吸収されずに自治を保っていた国々もいくつかあった。アコリス遺跡はナイル中流域（中エジプト）に位置する。ここでは1980年代から日本の調査団である古代学協会（京都）が調査をしていた。1990年代初め以後、少し中断したが、1997年から新たな体制で調査が再開された。治安の悪化によって夏は中止し11月にはテロがあったが、12月末には調査を開始することができた。その後は毎年夏に調査を行っている。とりわけヘレニズム時代の歴史を考える上で重要な調査である。

アコリス遺跡で暮らしていた人は石灰岩の採積をしていた。そこは今日干し煉瓦で蔽われている。アコリス遺跡については四年間、部分的に発掘を行っている。そこにはネロ神殿や中央（サラピス）神殿が建っている。エジプトはイスラム教のような印象を持つが、実際には人口の一割がキリスト教徒である。中エジプトはとりわけキリスト教徒の割合が大きく、二、三割がキリスト教徒であると言える。

プトレマイオス王のためにつくられた神殿には、「プトレマイオスの子プトレマイオス王（５世）のために、（この王は）偉大な顕現神であり恩恵神（であるが）、エルゲウスの子アコリスが救済女神イシス・モキアスに（捧げた）」と記されている。プトレマイオス朝では、王の名は全てプトレマイオスであった。ここに顕現神であり恩恵神とあるのはプトレマイオス５世の添え名である。ロゼッタストーンに登場する王がプトレマイオス５世である。

【都市域北端区における発掘成果の意義・アンフォラとは何か】

遺跡周辺に古代に石を切り出した痕跡があることを発見した。焼けたため赤っぽくなっている土が石を蔽っているが、そのなかからヘレニズム時代のものが発掘された。1997年からの発掘により、加工途中の石灰岩ブロック埋土からヘレニズム時代の文化層が検出された。物質文化には、ギリシアからの強い影響があったということが分かる。ヘレニズム現象は地中海に面したアレクサンドリアにとどまるものではなく、アコリスのような内陸部にもヘレニズムは浸透していたことが分かる。ここからプトレマイオス５世への磨崖碑文の背景が明らかになる。とりわけ重要な資料は、膨大な地中海系のアンフォラ（交易用ワイン壺）の破片であり、この78%がロドス産である。

アンフォラとは本来は両側に把手のある容器の総称である。ワインなどの液体商品を輸送するための土器である。アンフォラの特徴として、持ち上げるのに容易なように底部が尖っており、船底にぎっしり積むために胴部は細長い。紀元前四世紀の末からしばしばスタンプを伴っている。考古

学的証拠としての重要性として、スタンプから詳細な編年が可能であること、産地同定が容易なため交易ルートが復元できるということがある。

ワインの壺は船荷にもなり同時におもりにもなることによって安定した航海をすることができた。アンフォラの把手の両側にスタンプが押されている。たとえば片側に「アンティマコス＋杖のマーク」のスタンプが押してあり、もう片側に「神官アリストンの年（ca. 167)、アルタミティオス月」と押してある。よく使われるのが太陽神ヘリオス頭部とバラの花である。古代のロドスの人々は自分たちの国がギリシア語でバラを意味するロドンに由来するに違いないと考え、自分たちの国を表すのにバラの花のマークを使っていた。350点ほど出土したアンフォラの破片を一点一点調べ、2005年にアンフォラの報告書を出した。ロドス産アンフォラの年代分布をつくるときれいな正規分布となる。

【年代分布の意味】

なぜ、アンフォラはこの地にもたらされたのか？おそらく石材を運んだ船の帰り荷であろう。アンフォラの年代分布には二重の関係が反映されている。第一にエジプトと地中海世界との関係である。具体的にはロドスによる海上交易の展開、エジプトからの穀物と地中海からのワインということである。第二にアコリスと首都アレクサンドリアとの関係である。具体的にはアコリスからの石材とアレクサンドリアからのワインということが考えられる。

年代分布から分かることとして、ロドスによる東地中海交易はロドスが紀元前164年に政治的にローマに屈した後も依然として活発に続けられたということがある。なぜそのピークが紀元前150年頃にあるのかについては今後の検討課題である。政治的に屈したからといって文化的に衰えたということは言えないということが言える。ヘレニズム時代の東地中海では、ロドスによる海上交易を通じて経済的・文化的な一体化が進んでいた。ローマが進出しようとしていた東方への道にはすでにロドスによってレールが敷かれていたと考えられる。それによってローマが進出できたということが言える。

続いて現在行っている調査についてお話したい。とても大きな古代の採石場があることを2003年ぐらいに発見した。近くにある村の名前をとってそこを、ザウィエット・スルタン採石場と呼んでいる。そこには当時の人が石の表面に書いたメモが残っている。ある時期に土が蔽っていたため、風化せずに文字が残っていたと考えられる。ギリシア語とエジプト語が並記されている。両者とも同じ内容であり、一行目に採掘の年月が、二行目に責任者か誰かの名が、三行目に採掘しようとした石材に関する大きさが記されている。ここから、ザウィエット・スルタン採石場は紀元前３世紀の後半のものであるということが分かる。

採石調査は名古屋大学だけで行っているわけではなく、九州大学の工学部と共同で行っている。調査の朝は早い時間から採石現場に向かう。そこの村の人たちとはアラビア語で話す。歴史とは、最終的には現代社会を考えるものであるが、現代社会とは表面の部分であって、その奥にはものすごく深い世界がある。その時間的な深さを研究し、現代社会の問題の根を探るというところに歴史の研究がある。またグローバル化は現代社会に特有の問題と一見思われるがそうとも言えず、ギリシア語とエジプト語が並記されていたことからもそうではないことが分かるだろう。

4. 日本語に入ったインド古典語サンスクリット（梵語）

和田壽弘先生（インド文化学） 2009年8月3日（月） 13：00―14：30

概要：古代インドで使われていたサンスクリットの単語が、お経などを通して日本語に取り入れられました。こういった単語の特徴を考えてみたいと思います。

（資料：A4×4頁）

【サンスクリット（梵語）の「発見」】

インドについてどのようなことを知っているだろうか？たとえばジャイナ教、カースト制度、インドカレーなどがある。現在のインドはヒンズー教の国であるが、インドで仏教が発生したのは紀元前五世紀ぐらいのことであった。それから紀元後十三世紀ぐらいまで仏教は盛んであったが、その後に衰退する。今日はどのようなインドの言葉が日本に残っているかということについてお話をしたい。なぜそのような言葉を翻訳せずに音のまま取り入れたかについてもお話したい。

そもそもインドの古典語として尊敬されていたのがサンスクリットである。それは中国では梵語と訳され、日本に入ってきた。サンスクリットというのは言葉の名前であるので、サンスクリット語とは言わない。英語のことをイングリッシュ語と言わないのと同様である。インドにサンスクリットがあるということが発見されたのはごく最近であり、ウィリアム・ジョーンズ（1746－1794）の講演「インド人について」（1786年2月2日）によって報告された。彼はイギリス人であり言語学の天才である。サンスクリットがギリシア語、ラテン語、ゴート語、ケルト語、古代ペルシア語と動詞語根においても文法の形式においても顕著な類似を示すことや、サンスクリットがもしかするとそれらよりも古い言語であるかもしれないということが報告された。彼は『シャクンタラー』や『マヌ法典』を翻訳している。

【今に残るサンスクリット】

今に残るサンスクリットとして、インドの公用語22のうちの一つとして聞くことができる。1981年の国勢調査によれば、サンスクリットの話者には6106人がいる。インドにはカースト制度があり、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラがあるが、サンスクリットは伝統的バラモンの家庭で使われる。ラジオ、テレビ番組、大学の授業などの中にはサンスクリットで行なわれているものもある。

続いてサンスクリットの文字についてお話をしよう。100ルピー札を見てみると、金額が公用語22のうち13の言語で書かれている。①アッサム語、②ベンガル語、③グジャラート語、④カンナダ語、⑤カシミール語、⑥マラヤーラム語、⑦マラーティー語、⑧オリヤー語、⑨パンジャーブ語、⑩サンスクリット、⑪タミル語、⑫テルグ語、⑬ウルドゥー語（現在は、コンカン語、ネパール語が追加されている）

このように、サンスクリットは現代のインドで生きている言語である。バラモンの家庭ではとりわけ長男はサンスクリットを話すように要求される。

【サンスクリットとギリシア語・ラテン語との親近性】

サンスクリットとギリシア語・ラテン語には親近性がある。

	サンスクリット	ギリシア語	ラテン語	英語
父	pitar	pater	pater	father
母	mātar	mater	māter	mother
兄弟	bhrātar	phrater	frāter	brother
新しい	nava	neos	novus	new
3	traya	treīs	tres	three

【サンスクリットのアルファベット・名詞：男性、女性、中性】

続いてサンスクリットのアルファベットを見てみよう。

簡単に言えば、母音とは一定の音を続けることができるものであり、子音は連続して発音することができないものである。日本語の「あいうえお」は奈良時代にサンスクリットの母音を真似したものである。サンスクリットの子音については日本語の「あかさたな」に似ている。日本語と同じで、たとえば「か」の場合、kとaで一セットとして読む。サンスクリットの数字はアラビア数字に似ている。アラビア人を通じてインド数字がヨーロッパに入ったため、インド数字がアラビア数字と呼ばれるようになったのである。「0（ゼロ）」もインド人がつくりだしたものである。

続いてインドの叙事詩の一部を、音を紹介するために読んでみよう。

サンスクリットの単語の特徴を見てみよう。名詞には男性、女性、中性がある。八格に変化し、単数、両数、複数がある。このようにサンスクリットでは８×３で24の語形を覚えなければならない。

【日本語に入ったサンスクリット】

今日の授業の中心である、日本語に入ったサンスクリットを見てみよう。ここでは固有名詞は除いてある。

まずカーマというお店があるが、kāmaはサンスクリットで望み、希望、愛欲、愛などの意味がある。またソーマというお店があるが、somaはインドの儀式のときに使うアルコールである。この成分は分からない。ラーマというマーガリンがあるが、Rāmaは『ラーマーヤナ』の叙事詩の主人公の名である。

続いてサンスクリットが日本語に取り入れられてそれらが漢字表記になったものを見てみよう。阿闍梨はācāryaがもとであり、先生を意味する。盂蘭盆はullambanaがもとであり、逆さを意味する。瓦はkapālaがもとであり頭骸骨を意味する。袈裟はkāṣāyaがもとである。讃岐の金比羅はkumbhīraがもとでありワニを意味する。このワニが仏教に帰依したので、仏教を護る神として祀られるようになった。護摩はhomaがもとである。三昧はsamādhi、獅子はsiṃha、娑婆はsahā、刹那は１／65秒、あるいは１／75秒と説明されるが、kṣaṇaがもとである。舎利はśarīraがもとであり体の意味である。旦那はdāna-patiがもとであり、贈りものを贈る主人の意味である。寺はthera、鳥居はtoraṇaをもとにした言葉ではないかと言われる。南無はnamasがもとであり、帰依するとい

う意味がある。ちなみに挨拶のときにnamas-teと使うのは、あなたに帰依するという意味である。朝、昼、晩のいつ会ってもナマステという挨拶はとりわけ北インドやネパールでよく使われる。奈落はnarakaがもとであり地獄の意味である。鉢はpātra、馬鹿はmoha、すなわち愚かで迷いがあること、あるいはbālaがもとであると言われている。まだらはmaṇḍalaがもとでありごちゃまぜに並べられている模様を言うときに使うが、真言宗の曼陀羅のなかでは仏が規則正しく配置されており、それを見てごちゃまぜと考えたということは、日本人が体系的なものとしてとらえることができなかったということを示している。無駄はmudhāがもとである。摩訶はmahāをもとにしておりgreat、とても、という意味である。

普段私たちが使いそうな単語がサンスクリットから入っているということが分かる。なぜ日本語ではサンスクリットを翻訳せず、音のまま使っているのだろうか。これについては、もともと日本語にはない考え方については日本語に翻訳不可能であるために、音をそのまま使って日本語のなかに残していったのだというように考えられる。また、翻訳したのでは、元の意味がそこなわれると考えられたのであろう。昔の日本では外来語をカタカナ表記したわけではないので、私たちはそれらが外来語であるということを知らず知らずのうちに使っている場合がある。

またお経は意味のあることを言ったものであるが、日本語で翻訳をせずに読むため、まじないのようにしかなっていないのはもったいないことである。インドと日本とでは先祖供養の考え方など通じる点が多い。私たちは普段意識はしていないが、インドと精神的な文化の面でつながっている。さいごにスバーシタという諺の一つである「真実は母、智は父、教えは兄弟、情けは友、寂静は妻、我慢は息子、これら六つは私の家族。」を詠んで今日の授業を終わろう。